



憧れの奈々子先輩のパンプスの匂いと抑えられない欲望

ここはとある中堅商社のオフィス。

営業から戻り、デスクでキーボードをたたきながらも視線はモニターではなくある女性を追っている一人の男が居た。

彼の名は中野 翔太（24）

新卒でこの会社に入社し、今年で二年目の新米社員だ。

彼の目線の先の女性——桐谷奈々子（27）は入社三年目の総務部所属。

中途入社で翔太の一年先輩。

清楚で、朗らかで、ちょっと天然。社内での人気も高く可愛らしい女性だ。

翔太にとってもフランクに接してくれる優しい先輩だった。

でも翔太が彼女に惹かれている一番の理由は
――

彼女が履いているパンプスだった。

彼女の履いている黒のプレーンパンプス。

少なくとも翔太が入社してからずっと同じパンプスを履いている。

くたびれ、つま先部分には履き皺が目立ち、かかとは度重なる脱ぎ履きでやや潰れかけている。

女性の足の匂いや履き潰された靴に性的興奮を覚える大の足フェチである翔太は、彼女のスラっとしたストッキング越しの足に履かれているその少しくたびれたパンプスに毎日のように目を奪われていた。

（奈々子先輩のパンプス…絶対、蒸れてるよな…一度でいいから匂い嗅いでみたいな…）

そんなことを思ってしまう自分が、嫌でもあった。

けれど、どうしても気になる。

——先輩のパンプス、一度も洗ってないらしい。

以前、奈々子が他の女性社員と会話しているそばを通った時に聞こえた、何気なく彼女が口にした一言が、翔太の中で脳内ループを始めていた。

「え？このパンプス？入社の際に買って以来ずっとこれかも。そういえば洗ったことないかも(笑)、なんか馴染んじゃって履きやすいんだよね～」

奈々子は笑っていた。ただの世間話のように。けれど翔太にとっては違った。

その発言だけで、靴の内側で湿ったストッキングの足が何時間も蒸されている光景を想像してつい理性とは裏腹に下半身が固くなってしまう。

昼休み、社員が少なくなったオフィスで、翔太はふと視線を落とす。

奈々子は自分のデスクに座り足を組み替え、その拍子にかかとが少し浮き、その隙間からパンプスの中敷きがちらりと見えた。

(……あの中、どんな匂いなんだろう)

気がつけば手が震えていた。
鼻を近づけたい、匂いを確かめたい——そんな欲望が込み上げる。

でも、そんなことをしたらすべてが終わる。
真面目に仕事をしてきたのに、その瞬間から
ただの変質者になってしまう。

それでも、想像が止まらなかった。

蒸れたパンプス。湿ったストッキング。こも
った足の匂い。

その奥にふわりと混じる女の子っぽい香り
——そんな“彼女だけの匂い”に支配される自分を、
翔太は想像しては震えた。

我慢しろ。忘れろ。こんな感情は異常だ。

だが、理性とは裏腹に、目はまた彼女の足元を追っていた。

翔太は奈々子のパンプスのことを考えない日はなかった。

仕事中、ふとした瞬間に目に映るその足元。入社以来ずっと履かれてくたびれたパンプス。

思い返せば大雨でよっほど濡れた翌日等、よっほどの事でもない限り奈々子先輩は基本毎日このパンプスを履いている。

汗と湿気、日々の歩行で馴染みきった靴の中で、あのパンプスはどれ程の足の匂いを蓄えているのだろうと思うと——頭がぼうっとしてしまう。

理性を保つことに、翔太は毎日疲れていた。

——そんなある日。

昼過ぎ、取引先との打ち合わせから戻ってきた翔太が、オフィスビルのエントランスを通り抜け、会社のとある社員休憩用施設の下駄箱の前でふと足を止めた。

(……あれ?)

視界の端に、見慣れた靴が映る。

覗き込むと、そこには——憧れの奈々子先輩のパンプスが、ぽつんと脱がれて置かれていた。

(……まさか)

中を確認するため、翔太は周囲をさりげなく確認する。誰もいない。

奈々子先輩、中で休憩中なのだろうか…。

靴が完全に脱がれている状態を、彼が目にするのは初めてだった。

(……こんな機会、二度とないかもしれない)

心臓がバクバクと高鳴る。
そして自然なそぶりを装いながら、彼はそつとパンプスの正面に立つ。

一歩、半歩、さらに近づく。

体をかがめ、靴の内側を——覗き込んだ。

途端に、翔太の喉が詰まった。

そこには、予想以上の現実が広がっていた。

履き潰され、黒ずみが滲んだ中敷。つま先のカーブに沿って深く沈み込んだ足跡。

かかと部分は擦れきって、印字されていたであろうロゴマークは彼女の足で毎日踏まれ、ほとんど消えかけている。

見ただけで「“臭いがする”」と確信できる。

あの中に、彼女の足が毎日、何時間も、密閉されていたのだ。

理屈ではなかった。

一気に込み上げてくるものがあった。興奮

と、興奮を覚えてしまったことへの罪悪感。
それでも視線は靴から離れない。

（あの中に…奈々子先輩の足が……）

理性のバリアはもう薄皮一枚しか残っていなかった。

鼻先に、ほんのわずかに湿ったような空気の
気配すら感じた気がした。

まだ彼女が脱いでからそう時間も経っていないのかもしれない。

——その瞬間、翔太の中で何かが決壊しかけていた。

(……嗅ぎたい)

この場で、屈み、そっと鼻を近づけて。
あの蒸れた空気を、そのまま肺の奥まで吸い
込みたい――

…そんな欲望を胸に抱えたまま、翔太はしばらくの間、ただただそのパンプスを見つめ続けていた。

翔太は、自分の鼓動がまるで太鼓のように響いているのを感じていた。

呼吸が浅くなる。喉が乾く。

「一瞬だけ」「誰にも見られてない」——そう自分に言い聞かせながら、そっと腰を落とし、靴の前にしゃがみ込む。

そして、パンプスの履き口に、鼻先をわずかに近づけた。

ほんの少し。数センチ。

それだけで、翔太の脳を突き抜ける刺激が走る。

——来た。

むわっと、湿気を含んだ空気が鼻腔に流れ込む。

鼻を突くような発酵臭と革の香り。

じっとりとした蒸れた酸味。

さらに、その奥にふんわりと残る——甘くて淡い、女の子っぽい香り。

それはまさに、奈々子という存在を閉じ込めた匂いだった。

(……これが……奈々子先輩の、足の……)

少しでもこんな匂いを嗅いでしまったらもう止められるはずがない。

翔太は、ゆっくりと目を閉じ、鼻を深くパンプスの内側へと押し当てた。

そして――

「クンクン……っ」

より奥のつま先部分に鼻を押し付けると、より強い納豆のような発酵臭と、酢昆布のようにねっとりとした濃密な匂いが脳に焼き付く。

ストッキング越しに蒸された汗と皮脂が混じり、長時間熟成されたような“まさに足の香り”。

なのに、その奥にほのかに漂う女の子らしい柔軟剤のような甘さが、たまらなくエロい。

翔太は震えていた。

(なんだこれ……こんな……やばい、俺、戻れない)

罪悪感も羞恥も、今はもう何も届かない。
ただ本能のままに、鼻を押し付け、憧れの
奈々子先輩のパンプスの奥の匂いを確かめて
いた。

——そのときだった。

「……中野くん？」

後頭部を殴られるような衝撃。
奈々子の、声だった。

翔太の全身が硬直する。

振り返ることができない。ただ彼女のパンプスに顔を突っ込んだまま、時間が止まったように凍りついていた。

数秒後——

奈々子は、ゆっくりと翔太の正面へと歩み寄ってきた。

ストッキングの足音が、乾いた床をペタ…ペタ…と響かせる。

「……そういうの好きだったんだね」

一瞬驚いたような表情を見せたが、呆れるわけでもなく、軽蔑するわけでもなく、

その声は、どこか——翔太の行為を受容しているようだった。

どうして良いか分からず硬直する翔太。

そんな翔太に彼女は、意外なほど優しい言葉をかける。

「怖がらなくて大丈夫よ。私、なんとなくだけど、分かってたから。」

興奮と恥ずかしさと焦燥感で感情がおかしくなりそうな翔太。

そんな翔太を前に、彼女はもう片方のパンプスを手に取り、くるりと向きを変え、パンプスの内側を向けてそっと翔太の鼻先に差し出した。

「……こっちの中も、嗅いでみる？」

それは完全な、誘いだった。

どう考えてもおかしな状況に理解が追い付かず、感情がおかしくなりそうだったが、翔太は本能に抗えなかった。

目の前に差し出された憧れの奈々子先輩のパンプス。

黒ずみ、擦れた中敷きが露わになったその内側からも確実に——本能を刺激する匂いが、漂っていた。

奈々子先輩のパンプス。
奈々子先輩の足の匂い。

翔太は、受け入れるべきか、逃げるべきかも判断できないまま、ただその匂いに飲まれていった。

（なんで……なんで先輩は、俺を拒まないんだ）

本来なら、悲鳴を上げて逃げてもおかしくない。気持ち悪い、最低、通報する——
そう言われても当然の行動だったはずだ。

なのに——

「……気になるんでしょ？ 私の靴の匂い」

奈々子の声は、ほんの少し、笑っていたようにも感じた。

まるで、ずっと前からそれを知っていたかのよう。

それが当たり前のよう。

翔太は、心の奥底にしまっていた欲望を肯定されたような気がした。

「……いいんですか…？」

しぼり出すように聞いたその声は、情けないほど震えていた。

「うん。好きなだけ、嗅いでいいよ？中にも私以外誰もいないから安心して。」

そう言って、奈々子はパンプスを彼の顔に近づける。

その言葉に、翔太の理性は完全に崩壊した。

彼は震える手でパンプスを受け取り、まるで宝物のように大切に、そっと両手で包む。
深く、深く、鼻を押し当てた。

「クンクン……っ、ふっ……ああ……」

パンプスの内側はまだ微かに温もりを残し、染み込んだ汗と皮脂が濃密に発酵していた。納豆系の蒸れた匂いが鼻腔を突き抜け、その

奥からじわじわと酢昆布のような酸味が広がっていく。

その奥にある、ほのかな甘い匂いが——

「……奈々子先輩の……匂い……」

理性の残骸が、最後のひとかけらまで溶け落ちる。

翔太はそのパンプスの匂いを、思う存分、何度も何度も吸い込んだ。

鼻をねじ込むように押し当て、吸っては吐き、また吸い込む。

一秒でも長く、この香りを体に刻みたかった。

奈々子はそんな彼を、黙って見下ろしていた。

少しだけ微笑みながら。
そして、少しだけ——見下すような目で。

翔太は、もう完全に屈していた。

パンプスの匂いに。
奈々子という存在に。
そして、自分自身の底なしのフェチに。

【告白と受容】

翔太は、まだ夢を見ているような感覚だった。

パンプスの匂いを嗅がせてもらった——それだけでも現実感が薄いのに、彼女は最後まで怒るところか、受け入れてすらいた。

その余韻を引きずったまま、2人は無言のまま会社のロビーへ向かう。

エレベーターを降りたその瞬間、隣に立っていた奈々子がふと翔太の方を見上げる。

「……あのさ、中野くん。よかったら今日……一緒に帰らない？」

「……え？」

「家までじゃなくてもいいの。途中でファミレスでも寄って、ちょっと話したくて」

その言葉に、翔太の心臓が再び跳ね上がる。
何かの罰だろうか、それとも――

だが奈々子の表情は柔らかく、優しかった。

「もちろん、無理ならいいんだけど……でも私、中野くんのこと、ちょっと気になってるから」

その言葉に、翔太は頷かずにはいられなかった。

終業後、駅前のファミレス。時間も遅いせいか、店内は閑散としていた。

窓際の2人席に座り、ドリンクバーから戻った奈々子は、コップを置いたままじっと翔太の顔を見る。

「さっきのことだけど……中野くん、私のパンプスの匂い、ずっと嗅ぎたかったんでしょ？」

「……っ」

凶星だった。

返す言葉に詰まる翔太に、奈々子はクスッと笑いながら首をかしげる。

「私、気づいてたよ。いつも足元ばかり見てたし、視線、ちゃんと感じてたもん」

「足の匂いが好きな人が世の中に居るってことはなんとなく知ってたから、中野君ももしかしてそうなのかなって…」

「ご、ごめんなさい……っ、ほんとに……気持ち悪いですね、俺……」

翔太は顔を伏せ、手を強く握りしめた。
このまま軽蔑されても、仕方がない。そう思っていた。

だが――

「……私は、そんな嫌じゃなかったよ？」

その言葉に、翔太は顔を上げた。

奈々子は、真剣な眼差しで続ける。

「他の人に言うのは初めてなんだけど、私もちょっと変な性格でさ。誰かに“私の恥ずかしい部分”を見抜かれて、それでも受け入れてもらえるの、ちょっと……嬉しかったの」

「え……？」

「私ね、昔からちょっとズボラで、女の子なのに消臭スプレーとかも面倒で使わないし、

靴とかも買ったら基本的に洗わないで耐えられない位臭くなるか、穴が開いたりして壊れるまで履き潰しちゃうし…でもそれを変えようとも思えなくて、ただ“女としてどうなのかな”って思ってたの」

奈々子は、ストローをくるくると回しながら、視線をテーブルに落とす。

「でも、中野くんみたいな人が、その“私のだらしなさ”を好きって思ってくれるなら……私自身を肯定されたような気持ちになるっていうか…」

翔太は言葉を失っていた。

こんな形で、誰かに自分の性癖が“肯定”される日が来るなんて、夢にも思わなかった。

「……俺、実は……ずっと前から足フェチなんです」

喉の奥から、掠れるような声で告白が漏れる。

「でも、それが普通のことじゃないって自分でも分かってたし……だから誰にも言えなくて……」

奈々子は静かにうなずきながら、言葉を待っていてくれた。

「奈々子先輩のパンプス、あのくたびれた感じとか……中で蒸れてそうな雰囲気とか……なんていうか…綺麗な奈々子先輩とのギャッ

プにどうしても我慢できなくて……ごめんなさい、本当に……」

すると――

「ふふ。やっぱり中野くん、変わってるね。でも……私そういうの、嫌いじゃないよ？」

奈々子はにこっと笑って言った。

「それに……私だって好意を持ってる人にしかこんな話できないし、ましてやパンプスの匂いなんて嗅がせないよ？」

そのひと言で、翔太の顔は真っ赤になった。

(好意を持っている人――？)

目の前の彼女は、いつも通りの柔らかな笑顔で、それでも確かに、彼を受け入れてくれていた。

翔太はようやく、自分が堕ちてしまった場所が、どれほど幸福な沼だったのかを理解し始めていた。

「……ねえ、中野くん」

ドリンクを一口飲んだ奈々子が、ふと視線を上げる。

柔らかい声。
だがその裏に、どこか艶を帯びた熱が潜んでいた。

「今日、この後……良かったら、家に来ない？」

「……え？」

翔太は一瞬、言葉の意味を理解できなかった。

奈々子はそんな彼の反応を楽しむように、少しだけいたずらっぽく笑った。

「家ならさ……他の人のこと、気にしないでいいし——」

コップの縁に指を添えたまま、彼女は囁くように続けた。

「好きなだけ、パンプスでも……足でも……
嗅がせてあげられるよ？」

その瞬間、翔太の喉がゴクリと鳴った。
店内の空調の音すら遠ざかるほど、世界が彼女
のその言葉で埋め尽くされた。

——好きなだけ。

——足でも、パンプスでも。

「……本気で、言ってます？」

声が震えた。答えを間違えたらすべてが壊れる
気がして、慎重に言葉を選んだつもりだった。

「うん。本気だよ？」

奈々子は、まっすぐ翔太を見つめて言った。

「中野くん、すごく素直だったし……なんかね、あんなふう to 私の恥ずかしい匂いを嬉しそうに嗅いでくれる人、初めて見たから」

「……っ」

「だから……もっとちゃんと、“私の匂い”をあげたいなって…」

その言葉に、翔太の中で何かが音を立てて崩れた。

彼女は、完全に受け入れてくれている。
それだけでなく、与えようとしてくれている
——“自分の欲望そのもの”を。

「……行きます」

気がつけば、答えていた。

「奈々子先輩の家に、行かせてください」

彼の目には、すでに迷いはなかった。

奈々子は嬉しそうに微笑み、小さくうなずいた。

「じゃあ……決まりだね！」

翔太は、今夜、自分が何を体験するのか——
どれほど深く奈々子の足と匂いに溺れていく
のかを、まだ知らなかった。

だが一つだけ確かなのは、

もう、後戻りできない

ということだった。

【玄関での抗えない誘惑】

時刻は 20 時過ぎ、奈々子の自宅前。

玄関のドアが閉まる音が、いつもより重く響いた気がした。

マンションの一室。柔らかい照明と薄く香る女の子の部屋の甘い匂い。

だが、翔太の意識はすでに“彼女の足元”にしかなかった。

奈々子の履いているパンプスは、昼間と変わらずくたびれていた。つま先の履き皺、小

傷、かかとは潰れ皺が出来て、毎日彼女の足で酷使されている痕跡がたまらなかった。

——ここにはもう、他人の目も、理性もない。

翔太はゆっくりと、彼女の前にしゃがみ込む。

「……奈々子さん」

「……うん、いいよ。したいこと、全部言っ
て」

その一言で、最後の扉が開いた。

「じゃあ……そこで、靴をちょっとだけ、半分だけ脱いでもらってもいいですか」

翔太はその場でしゃがんだまま、奈々子の足元をじっと見つめる。

奈々子は何も言わず、ストッキング足を軽く持ち上げてトン、と床を叩く。

くたびれたパンプスが、かすかな音を立ててかかとから浮く。

薄いストッキング越しのかかとは、パンプスから顔を出した……。

【この先の展開】

- 半脱ぎパンプスの隙間に鼻を突っ込んでの匂い嗅ぎ。
- パンプス脱ぎたてストッキング足のつま先直嗅ぎ。
- 止まらない足責めからの複数回に及ぶ絶頂。
- 部屋に上がってからのさらに濃厚な足フェチ展開 etc…。

奈々子の家での濃厚な足フェチ描写満載の後半は製品版で！